

季刊誌 C E L 4 8 号

「 C E L からのメッセージ 」

大阪ガス エネルギー・文化研究所 副所長
安達 純

今後の日本社会の進路を見定めるために、一度外からの目でこれまでの到達点を振り返っておきたい、というのが季刊誌 C E L 4 8 号の狙いである。

C E L 自身もまた、21世紀に向けて新たな道を模索しつつある。「今、この大変困難な時代に C E L の存在価値は何か」を巡って、所内ならびに社内で議論を進めているところである。結論までには、いま暫くの間をいただきたいが、本号では、最近の C E L の研究活動について、その一端をご紹介させていただくことにしたい。C E L のこれからのスタート台がどこにあるのか、の確認のためである。

まず、経済社会分野では、昨年11月に前市岡楽正がこれまでの約4年間の研究成果をとりまとめ、「安定への選択 21世紀の労働問題」(「K B I 出版」)を上梓した。その内容は、人口と経済の安定期への移行という長期的展望の下で、現在わが国が選択を迫られている人口・労働・経済問題にどう対応すべきか、という難問に真正面から挑戦したものである。この本は、季刊誌 C E L 9 6 年 6 月号よ

り 98 年 6 月号まで 9 回にわたり連載された論考を基にしている。

次に、国際経済分野では、豊田尚吾がグローバル・スタンダードの問題について、グローバル・スタンダードとは与えられるものではなく創るものである、との問題提起を行った。その主張は、「真のグローバル・スタンダードとは、地球規模で何が正しいかの判断の下に、われわれ自身がルール化していくものである。日本は経済倫理や環境・エネルギー問題などの分野でグローバル・スタンダードづくりに貢献できるのではないか」というものであり、この論考は、平成 10 年度の東洋経済「高橋亀吉記念賞」の優秀賞を受賞した。（「週刊東洋経済」98 年 1 月 28 号に論文掲載）

環境問題の分野では、CEL 前所長の山藤 泰が、著者であるエイモリー・ロビンスの依頼に応じて、「環境『利益』 CLIMATE」を翻訳、上梓した（「KBI 出版」平成 10 年 11 月）。環境（気候）保護がもたらすものはコストではなく、むしろ利益であるということが主な論点であり、これを豊富な実例を挙げて検証している。

都市問題の分野では、昨年 11 月 5 日に開催された朝日新聞 120 周年シンポジウム「大阪ひと・まち・みらい 21 世紀都市の可能性」で、栗本智代が、なにわの語りべ「中之島ものがたり」を自作・

自演した。その中で栗本は、大阪の魅力を再発見し、その歴史と可能性を次の世代へと語り継いでいくことの大切さを訴えた。具体的な内容については、現在、季刊誌 C E L に連載中の「大阪再発見シリーズ」や日本経済新聞「NEXT関西」歴史・文化欄への数次にわたる投稿などをご覧いただきたい。

食文化の分野では、山下満智子によって「FROM KITCHEN 家庭の食事 「食」研究レポート」(「K B I 出版」98年12月)が上梓された。食生活に対する意識の変化を踏まえて、コンビニエンス、ヘルシー、集い・ふれ合いなど多様な視点から、すぐれた生活者の智慧を私たちの日々の暮らしに役立てようというものである。この本は、ハウス食品株式会社、タイガー魔法瓶株式会社、松下電器産業株式会社と C E L が共同で進めてきた「豊かな食文化研究会」の過去5年間にわたる活動の集大成でもある。

この他にも C E L は現在、エネルギー・環境、経済社会、住まい、まちづくり、文化などさまざまな分野で研究活動を進めている。

こうした C E L のそれぞれの流れがひとつになり渦をつくりだして、これからの社会に少しでもお役に立つことができればと考えている。